

## わたしの戦争体験

北九州市小倉北区 安倍 新

昭和20年25日の夜19時頃、私達は近所の御老人と婦女子と子供達を新築の社宅の真中に位置する集会所の2階にかくまって、私は弟と二人で部屋に残り、畳を上げて窓枠に立てかけ、ガラスを割られても侵入しにくく貼りつけておりましたところ、『とんとん』しきりと玄関の戸をたたく音がした。「どなたですか」と大声で聞いてみた。「危ないからすぐ出て隠れて下さい。民衆が押し寄せて来ます」。日本人ではないような言葉の発音であったように思う。弟と二人ですぐに裏出入口の方より飛び出してあたりを見回すと、松明を持った多勢の人が近寄って来るのが暗い夜空の下にくっきりと浮かび上がっている。「わあ押し寄せて来たな」と思うが早いか、二人は裏の高梁畑の中に身を隠し、うつぶせに倒れて顔を伏せていた。畑の中からは多くの民衆が松明片手に家の中に入り、火を付ける前に私達が帰国のために荷造りしていた行李をいとも簡単に軽々と担ぎ上げ、全部持ち出してしまった。父の履いていた赤茶長靴を持ち出しているのも見えた。社宅の中にはまだ逃げ切れず、残っていた人もいたようだ。後で聞いた話ではお産をしたばかりの奥様がいて、旦那様がかばって民衆と争ったと聞いた。そのうちに社宅に火が入ったようだ。高梁畑もその火によってはっきりと見通せるようになった。私達の横を民衆が略奪してあわてて逃げて行く姿もくっきりと見えた。こちらも隠れているのが見つけられそうで、小声でお互いに名を呼び合い無事を確認し合っただけでじっとするのみでした。

夜も白々と明け、朝早くどこからも見通せるようになった頃、あたりにいた日本人が少なくなったように見えた。私はすぐ弟の名を呼んだ。弟が寄って来た、他には誰もいないようだった。

すぐ飛び出したが、行く先の家もなく寄り所もなくなったので、近くの元警察署、今は中国の保安隊になっていた所へ飛び込んで行った。かくまっていた集会所より母と姉妹が飛んで来た。計5名と隣に住んでいた中村さんという御家庭の子供さん達4名の計9名で、保安隊にかくまってくれるように頼んだ。中村さんが中国語も達者で年輩者だった事もあり、初めは色々な面倒も見てくれ、粟高粱に少しお米を入れてみそ汁と一緒に食べさせてくれた。朝食のうまかった事、以前からお見知りだった事もあるあって大変親切にしてもらった、忘れられない。

少し休憩してホッとしていますと、その隊員の一人が飛んで来ました。「今、ソ連の兵隊が日本の将校と一緒に駅方向よりこの町へ日本人を捜しに来るので、あなた達をこれ以上かくまうことはできない。我々が罰せられるのでどこかよそへ行ってくれ」と言われ、私達はどうすることもできないまま、駅に行って次の計画を立てようと考え一旦ここを出た。ところが、母親が突然「一番下の弟がいないので、その子を待って一緒に連れて行く」と言って聞きません。民衆に追われてはぐれる前に、母が常日頃可愛がって何かと面倒を見ていた中国人の水汲みの男（赤目のボーイさんと呼んでいました）が、その人に末弟を無事にと頼んだのです。私達の行動を見ていた中国人の中に、赤目のボーイさんがいたのでしょうか、人に頼んで連絡を取って

もらい待つことにしました。小学校か役所の廊下だったか、その隅で一家全員と中村さん一家がいなくなっていた。後で聞いた事だが海竜県にいた日本人は、その暴動の夜、皆一斉に県公署の広場へ行って、軍を探して逃げるため大勢人が集まったと聞きましたが、私達は末弟が来るまで、母親の言うとおりに駅で待つことにしました。駅に向かう心算でいる間、私達は廊下の隅で小さくなっていました。外ではソ連の兵隊が来たとき私達の所へ教えに来てくれた中国人がいました。覚悟はしていましたが、現に姿を見た時はびっくりしたと同時に、なんだこんな子どものようなみすぼらしい兵隊だと思った。その他、一人年輩の老人と言ってもよいような兵隊がついていた。二人して私の方へ歩いて、自動小銃のマンドリンというのを抱えて迫って来た。

私に「お前は兵隊ではないか」と言って寄って来た。私は「兵隊じゃない学生だ」と言って下手なロシア語で他の事をしゃべった。その時は両手を上げてちょうど捕虜のようになっていた。腹は立ったが我慢して彼等を見送った。私も吟●浜に長くいたのでロシア語がわからないわけではなかったが、彼等に今なにを言っても通じないと思ったので、手を上げて彼等のされるままになっていた。何もかも取られた。時計、万年筆、手帳、命あつてのものだねと我慢した。その時間の長かったこと、静かになり周囲には中国人達が輪になって見せ物の如く集まっていた。日本人は私共一家だけだったようだ。

そのまま馬車に乗って駅まで行くしかなかったが、いざ行くにしてもお金がないと思っていたところ、母が腹に巻いていた小袋物の中にお金と手鏡、お数珠、虫めがねを入れ持っていたと言って、心配する末弟を待つ駅まで行こうと馬車に乗りました。母親を中心に周りに子供が輪になってかばうようにして馬車に乗っていた。駅までかなり長い時間のように思えた。

駅へ着いた所が、そこは中国人ばかり、日本人が行ったら何か物珍しいように、生きていたかと言わんばかりににらみつけてくるようだった。駅の一隅でうづくまっていたところ、駅ではソ連軍将校と日本人将校の人が私共の所へ寄って来て、「あんた達はどこへ行くのか」、私は「私達の行くあてもありませんが、末弟が駅まで来るので待っていて動けません。ここに来るまで待たせて下さい。お願いします」と言って哀願した。そうこうしている所、赤目のボーイさんが末弟を連れて私達の所へ寄って来ました。母親は涙を流し、再会を喜び抱き合っていました。元気な姿を見て私も涙が出まして安心しました。末弟が来た事によって兵隊さんは私達に「梅●河へ行きなさい。あそこは日本人が多く治安が良い所だから頼んでみなさい」と言って、切符を全員分買って来て汽車に乗せてくれました。「何もしゃべってはいけないよ」と言って皆を励まし教えてくれました。やさしい日本の将校さんでした。多分通訳員だったと思います。約1時間位で梅●河に着いた。初めての所で、右を見ても左を見ても日本人は一人もいないようです。駅の保安部に行って尋ねてみましたところ、日本人は皆小学校に集まっているのでそこへ行ってみたくれとのことでしたので、あまり遠くない小学校へ行ってみしたら、既に私達より先に来て避難している人達もいました。これから私達は寒い冬に向って行かなければならないのです。